

能風

柳多留
三六編

1147
35



門へ 9特
番 1147
巻 35



欠

今や川斐の邊ハ正をせと
てこがねを笑彌阿の向ハけ
のそえを考次とや雪の沖代
あし早以みぢくありはし
美重をなし子支那人のあまうを
祝しなりしは比すれよてかの必姑
名のみつよむろをかまねー編の
柳らるるはて無つ成を春春衣然あ
卯春

芥子評

掃海ハ此志おつたまじなり
 玉季
 橋杭へ素袖のすれり山田
 株水
 平人の中ても玉司は角流り
 志水
 つらまり次男は六位かあるなり
 尖正
 馬福よりワリヤ大京さん
 カナ
 信子ゆうえ丈一と定家権り
 川柳
 風袋を解りあはねり沖大名
 孤雲

柳世六

一

まじこちやな歌子名傳るまられ
 証書
 舞臺を飛来くかきをかか
 スメ
 細んくお下へゆのるをあはせ
 至書
 ぶらぶらありと傳る并戸を埋
 東子
 まんねの三ま志はいいなり
 三枝
 おくた入自志のあむつうい
 海人
 腕をあげていふ娘の役あそく
 白鬼
 白太文もーやえうまんをあん
 ト丸
 秀が方ひんするの所作なり
 カシ

初母ハ向の人を七度よび
 後赤牛足其のそば子居
 兄イだけ母まれあい室の梅
 おか下り子土、しが三つおつへまされ
 吾れを賜くるそばで耳くる
 徳子でもおねの質のりながし
 行身こそ今ハ老又つける安松魚
 高マイヤの酒の使子下戸をせり
 那須の手市母を助出ささるへ

一九
 五丁
 市徳
 百銀
 松系
 井二
 百々
 金信
 松系

柳世六
 二

けくくふふあげらかき市のあ
 二千九百九十九人のあ年
 ふこのてうはねらうく養られる
 喰料ハすじふこのたやうはし
 和く風俗のりう子てれん

百々
 里家
 千五
 横好
 百高

門評

巨ハ水君ハ秘く脚上覽
 沖雲運立者を表す此藤子
 印を鼓子橋おこらねおんやうさ

毛季
 孤雲
 お香

而幸出を納メ具呈へ仰有れ
 カラウ
 不き食下子水産不へ月さし
 有夕
 ありの府和洋の眼をさほし
 玉季
 水産加る重ハ妻井への有るなり
 其呈
 聖代の為ハ五日の風サ加まへ
 磯川
 道中子サ日も重なる牡丹なり
 夫正
 あらたうさ紐をさる有のあり
 古守
 妻井子まうあら波こハ石川
 里松
 所やうらう英ハ重の多秋ハ蟹籠
 聖季

柳世六 三

賢者のためし千代もひく小松殿
 柳雨
 梅子ハ正吹のちる名まやちり
 藻籠
 備後と後子え若る二夜のかけ
 暁香
 本ころハ和洋二人のちあおん
 玉季
 あん子そよいをさせたのハ市の正
 カラウ
 初定山七千毎の佳つつき
 海人
 急へんよあいと女ハ妻のる中
 春陽
 山果ち果産残ハ海そちなり
 無名
 孝女のかみさうつるささの水
 矢正

裡屋舎の派手ハサの又とあし
 梅の室より室のある暑はる中
 朽つたのハ葉 誦メとのハ麻子
 茶をろくくをぬを煮て唐子でん
 梅香の中見事のもはよ居 4
 雪の山屏風をにしく舞ハ連
 軟羊のぬれもたろまのくく言
 舟を動かけく免ハこのく唐子
 股晴さ不二の裾を子江戸の町

柳世六

毎鳥
 三松
 笠山
 天ノ
 五丁
 龍鳥
 飛鳥
 西夕
 玉葉
 四

申子子どのだし星とハ妻子のし
 態子でも田うぬハ質のちなり
 水坊の坊主水不述こなりここ
 白くくく 読もるこハ在ったし
 けくくいたくあびるかそ席のあ
 ころろろろがあるを悔え井戸をうめ
 多あがりをつれのくある程井沢
 大黒の方格こもるハ和崎作ッ
 手あけの谷ハ建家をとつし、記

長船
 升二
 古鳥
 玉葉
 西夕
 茶子
 百夕
 志夕
 葉石

初意といふ彩る子娘来り
菱餅と糍男女の舌かた

無名
至者

瓶声評

淨舟建敷も源氏の花る君
賢者のため一子代も形小松殿
物をきて二夜目の母をまら
ごうけつさ草庵をまつか
美童ハか先白浪あとよ
忍以知る梅子車く人たの

柳世六
五

香貞

柳馬

市風

东水

西家

スメ

けちせ焼すいとうけい子き人
お倉の傘くあつりぬれく
かちくこ彩まく明きのすり
酒白さ二日よ愛をんそ
急へんよあひさあハ英の子
名傳の壺目子うむ論町
笠人をあつたかめのもを
さや丁をぬげると江戸の月
おやち橋本命の長いこま

美物
寸尺
志水
朝冠
春駒
东水
市風
柳馬

凡の竹をさむの及燈明子あげ
 ちふハねハ娘はの子ハおまぬん
 源武経ハまのえれるハヤヤ
 二条ハ山をさむれハ 柳 橋
 こんぐまゝく子の身をさむる風
 雪の山屏風をこしく聲ハ通
 せんたくやまんホの人のあゝ喰い
 細尼くか布ハ巾の石をあはせ
 身を折かけハおろハいしく看る

柳世

其五
 海人
 龍角
 無智
 全
 池鳥
 楽補
 至者
 有父
 七

徳国会の瓜子ハ女の又をかり
 小松系加りみちらハ娘の礼
 年玉子をけハの巾を折系なれ
 かつきうち細細子ハ一の付
 猪の熊のやま系まきうまはし
 舞さがりハおまの子ハおまの
 六文をの十二文ハきハハハハ
 急の振ふたハおまハおまハ
 陰るやわらハおまハおまハ

無智
 海鳥
 文正
 柳角
 文正
 志水
 有父
 有父
 有父

西ちきりをかつ小重十社ニヤリ
あつし身つんがうよすんニヤ所
赤深ハあつふをある酒くはし
る童子きんまんが十をうまへる
まんぢうをのつまるちまが一族
こんれいのあすげらとをほをほは
それ溝夕社の子うぶのさうい
舟ほえさうまおがむ湯らみる
おちちちやんくいなるおまをねる

松六
七

門柳

登務

曉多

門柳

古多

車水

硯川

其五

松六

道中ハすれど入りお秘れぬん
ものまぐ今ゆりくと下甘へん
かる君因のまらふハつねん
門柳評
入廻こま浪はうたせぬ名あなり
神こ君禰と風こよ右たまひ
瓢箪ぐとんぶあまうけつ
所利運をたぶ系通う所味方
重級の小ハ橋の惣持多換

藻魁

廿尺

井隆

カ高

玉翠

雨夕

孤雲

松系

道中ハすれど入りぬれぬん
ものまぐ今中しくと下甘へ
光る君因のまらふハつね
入廻りま浪ハたせぬ名あり
神と君麟と風とよ右たまひ
瓢箪ととんぶおまじりけつ
河利運をたぶ系道ウ河味
皇級の山ハ橋の惣挿

門柳 皇積 曉多 門柳 古鳥 車水 礫川 其屋 松の

挿六 七

門柳評

道中ハすれど入りぬれぬん
ものまぐ今中しくと下甘へ
光る君因のまらふハつね

藻姫 廿尺 井隆

入ねハ大門口の日の出なり
道法の推しきめハ 柳法^ガ法^ハ法^ハ
押部^ハ松^ハ松^ハ松^ハの通りをへ
日本の掃海ハ舟の名をなすり
大坂の毒切^ハ江^ハ江^ハへなり
舟^ハ舟^ハ舟^ハを舟子^ハ舟子^ハ舟子^ハ
うすくハ舟子^ハ舟子^ハ舟子^ハ舟子^ハ
伊達子^ハ伊達子^ハ伊達子^ハ伊達子^ハ
鐘^ハ鐘^ハ鐘^ハ鐘^ハ鐘^ハ鐘^ハ鐘^ハ

柳世六

里産 矢正 秀貞 万壽 志水 海人 舟子 金勝 舟子

舟子^ハ舟子^ハ舟子^ハ舟子^ハ舟子^ハ
丸^ハ丸^ハ丸^ハ丸^ハ丸^ハ丸^ハ丸^ハ
おやく^ハおやく^ハおやく^ハおやく^ハおやく^ハ
舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ
舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ
舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ
舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ
舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ
舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ
舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ舟^ハ

五町 三枝 三枝 矢正 玉孝 芦風 左邊 矢正

誠後より係し皇の命如へ
高ッ馬よまろくをたろく自氣
風来やつり風をひいそ居る
十の子の名代ハ酒こころかりし
蕨也を湯をく飲す平家蟹
高橋を女扇の志やぶ神ろの母
山の神あれく山家ののびりこ
ごんづるをともやげく病おぼるこ
あつ延形雀のありの神紋日

柳世六

柳馬 白兔 如石 菅笠 里雀 矢正 如石 十

蘆靴へ壺井のろをいれく漆
六ちんのやかくとあるはハハれ
二女目があつとて井ろハすろ
横町の煮入りハ井の吸地
せりあハハ身から一のやうな毎
山伏ハこまんとくを氣を平くを
ふさあ梅はご子をへく居る
今日ハ是切由びをあつこねま
美をすへくせく土家活居り

草紙 柳馬 志水 朝禮 右馬 忠右

玉章評

神歌上たろく行をぢひく来り
神祇意ハ松ハ齋の通りもへ
琴昌さ清玉の祓を神へ入れ
酒へめく不二の相ハ風よなり
定級の子イ門あ子府をな
尾少を及すハまのあの所蒼意
入込子流ハうたせぬあ不なり
此書がまろく雀の丸を多キ

柳世六十一

三枝 香貞 門折 卜丸 里家 井子 カサラ 柳柳

糸の津の土ハ伽羅でハ踏ぬん
逢り通ふぬガ護の目ナリ
お井出あハ紫のまぶら
くまのへれ委をのこす皆符
奥足控米びのよりハ終なされ
常ハやいさう雀ハハハ
さかしめを幼迄格くハハハ
千代の美ハくハ雀ハハハ
果えの浅おん常ハハハ

川折 糸多 雀 丙メ 蛇因 三イメ 香貞 門折 三枝

背をよけらるゝ火つ不流子あり
孝母のやう子すぶ六段子と入れ
こやく在奥へは程子ぐあり
飛鳥山うひくそのハ格をうり
心宿附の多毒子し〜あう〜れる
大名を相知りよす子あはれ
おでハひやく〜させるを津 案
浪きせりあこつあま〜あつをま
始美のえせハひさ〜のよへあ〜

折世六 十二

三枝

曉子

金勝

五丁

五雲

カニ

無子

古子

いひらぐ酒の相も子陸があら
羅漢のませんありぐ〜ある
本食の地もぼ〜をちあち
める日ハだんごも〜あつを
八月月子流れく曲扇さやむん
傘と草履のい〜ね〜月寺
天人へ美る氣う紅やか〜あ〜
すげ久〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
塩の目をす七ハ〜み〜あ〜あ

折百

文正

芦風

松葉

水石

柳鳥

恒小

三枝

黒雀

持系姫名遠環地茶やぐす
 井戸掘へ人の指を汲みけり
 笠の並中しぐ男の口もあせ
 手履糞折橋ももるなり
 赤川の青き月の手澤へ
 申の日子三枚半ハさくよー
 抜ぶこを一口くく煎をやき
 ぶさあ梅ぼごまへく居る
 灸をすくましく土器居居 二り

不又
 赤馬
 卜丸
 秋道
 夫正
 志夕
 金膳
 柳社
 赤馬
 十三

柳社六

藤の五ちり井ヶりまふへ
 在り赤馬村へ初使へ

集馬
 柳馬

柳声評

譽昌は法圓の秘を社へ入れ
 響くね鶴ハ群集の中をけり
 堀り福とよみハ秘所あり
 謎も通ふねう謹のこゝろへ
 謹美ハ人の涙もね有かへさ
 和洋の秘人ハ被と七尺

川柳
 春馬
 春馬

三季同を子母ハうら死
 血ハ水也ありあつく帰す
 車ハあましく遠く九季の暇を集
 二十朝あり夫等の暮をうち
 孝ニありふ孝ともなる橋一ツ
 くら均へれ義をのこる當 冠
 雲の舟校子かけりるのた
 申の能ハなまじうれく琴を止
 阿のへいのおまを立跪とあやうを法

五丁
 カナ
 白冠
 柳雨
 里家
 百夕
 絶多
 一徳
 羊妻

所世
 十一
 十四

一トつおをるつけす足の夏
 祝も子ハ用え舞ハ鳴く以キ
 大馬も儀もえへるに日ウみ
 泣れく嵐子大馬を一本加
 三正の儀をを子娘ハ廻し
 者子居の日カ潔白の境 海
 かれ切こもく生まハいまく死
 遠うりましくなること白服の瘡流
 下あがもくをりくたむ子子の帯

左邊
 加文
 無言
 一徳
 玉季
 音者
 井子
 松葉

百人の中へ美雨を三つすへ
 一徳
 けいこのハ梅と云種まららぐひ
 大遠
 砂でハ砂やくくさるるを津楽
 無事
 出賣の果根よに其不事産家
 集意
 い上戸一ツをい吞ムト村をまげ
 一徳
 五段も務ず子右我を立廻し
 射夕
 頃ヶハ飛ぶやうな将奈に附木の安
 無事
 大ちがい並ト谷中のいろはなり
 玉事
 ぶらぶらの中かく五段も似なれ
 甘高

折世六十一

ありお畑を百子と申詠が溜めま
 雨夕
 手えこれ美血のさ母よたり
 ハ
 位子昏が口をまらまらそれんら
 春瑞
 傘ハ下張の鼻流くすねら不
 若翁
 男よりあつたまきあいに天物云
 任小
 うすうい思ふ記く曇をねり
 五事
 ゆき川ハ宇治の合戦種まらへ
 玉事
 人のみんごく流あ流らなり
 芦風
 草前も流流のやまーさ
 川柳

此乃勝處をあらはし不女也
 負をす人さそく出雲徳后日
 みんち糖く居り子糖糖子麻也
 相見の聲依殿さまのいさ
 柳百

箕山評

仏法と慈悲を多し初つて後
 石と徳と仏と意と叶ふ徳名うつま
 仏と八梅、松、竹、石、井、く、鳴、ま
 無名
 志々
 休二
 折世、十六

末来池のら急ハ仏意のうへをり
 十八を張くく急知入漢あり
 十二支々あ切り奥見汗凱臨
 月を詠え古以の山をわやうせ
 三人く教し徳人うすくまれり
 江戸え地の跡一ハせにこか祿
 百里余をそ日かりの御まきさ
 ふぶらくと海理ハ新虎の山
 江戸中らへ七を通りハ急ぐく
 地月
 無名
 一徳
 松前
 古名
 吳林
 無名
 玉手
 寛奴

有がきり人万も放生會 雨夕
 正平八地多し知れる世津の名 川柳
 由父子し千と百とを以多し 是乐
 何よりの子向奥女をたくと也 秋夜
 稻妻を鳴り子孝の寺まへり 柳雨
 我娘の禱立血メの結くお母 尾末
 下の句し四意の常ハ光らあり 斗丸
 紫ハ男の目の水く條ノ 有幸
 昔人の教ハ室子切つけし 五丁
 柳世六 十七

嵐山名の名不とおもられす 百仁
 多岩を括へおしとく大伽藍 有幸
 乾自かく二十余迄の夏ハ見え 岳能
 大の子を和らあさき鳥をうら 赤子
 千のちハ衣くさるる一ノ谷 夫正
 名ハかられくも名の言ハ山橋 雨夕
 尊子来く弘絶をなく舞舞 喜露
 管と舞もあましおのま 碓川
 風雅さハ横子折目のかろこも 有夕

井の振うもつく知家八振あり
 目こ山と耳ト口の石白あり
 麦飯の喰込ハせぬ女のつら
 子の探入る所ハ振う以て成り
 天草を喰ちしハ女あり
 来らたび子命の死ををわぬ
 程をうナニハ十八 急 取
 ひくくの七巻の道産名ハ信し
 女子ハ見せぬ法家のい、男
 折此六十八

此津がとけまゝにうとまゝく等
 疾申ハころんが程ハ伯をまき
 たんやをつん方とこハ遠人
 女海女とまゝくハ娘ををり
 奈高橋ハもんがまゝくハふり
 小川子油油川子裾あり
 陸の石まゝくハけハ湯を已し
 三度通通ハか蜀を子ハ入格
 兼布よりまゝぬのまゝハ女子ハ

赤子
 牛岐
 角叉
 熊鳥
 赤子
 升る
 水産
 砾川
 玉草

赤子
 赤子
 赤子
 赤子
 赤子
 赤子
 赤子
 赤子

馬者うじなげれはしを百なげ
凡そふきたれは新野奉少存向
依カく折くはひ糸らくくん
せきこんく去り状のあちとせき
やいりあまく折はかてくあり
なんのもの大言盛を七ツ喰い
極こんいそく者を二百きり
おもしろはあちり里分をつく
せめくものゆき基不乳を志がり

柳世六十九

万人
春瑞
留人
市風
純馬
盤谷
二丁
三雲
瑞鳥

舟科ら也哉のるを志つあり
本をげ一五七の相の江府をつけ
かびびるをまけらうすい縁者ん
喜板へ夕ま皇をまくこと
鹿目よりう八目まいよ姫あんと
おもしろは出れお性ちり本性
せきこんく去り状のあちとせき
うへあこのなひおをなひいそく者ん
お女希子せなあらう田を梅あり

夷物
二町
古馬
有幸
控者
春瑞
市風
三女
ト丸

孝にも志あり身うけも程志なし
 孝なく死に争げ志人よすての子
 格子を眼のまのあやぶ玉を以
 盆踊りまのくまのハ男の子
 柄子もをけく帛おつつける
 地ごとく六虎う次山あるとえん
 新乾の森かへり松おつてあー
 け弟不ん付せんを甲のよさ
 梅やーまきあうとををかんまハ
 海人
 シト
 笠女
 一徳
 古香
 射夕
 海鳥
 千城
 系糸

柳世六廿

蛇がわれハやとり坂のあつての雲
 ハ情を吐きのいのこむうーは
 結語結下中大臣のおかひたら
 日かろ梅楽まづク五十字
 入宛一甲曹ませく入れく名
 本笑
 九龍
 東夷
 青島
 至者

柳麦評

金銀ハ玉をく漢ハおらぶア
 赤風子をまじれく散り梅の玉
 梅宗の世尊こころよあがあり
 海鳥
 梅香
 三粒

新體ハ在ニ無クノるイハアケ
 文集
 ありありのちの流亦ハ玉の王
 無為
 左井戸ハ利久スルズキヲ守ル不
 是乐
 つの通も様々あせぬ名自なり
 無為
 平家方死んくかゞぬ官をり
 松葉
 赤松のまばしめうれいねづの妻
 善父
 琴の音ニ琴造の音を笑杖の音
 休子
 不川ハ舟ぐみすのあまのふ
 無為
 高任のつとじつとハ本なりなり
 矢正

折世六
 北一

妙法の値くハ強ク飯ノなり
 美人
 權持院ハ速ハの程をなませる
 カサウ
 正直のあめばやどる端まつり
 白兔
 一人ハもの二人ハなりくハんこ
 矢正
 すまを身ハれれくつんらん
 無為
 まゝハ島えあのみることハ
 白兔
 休婦人ハハ氣の子をさるこ
 白兔
 針箱をりくおぼハ把後のち
 舟者
 みてハやつ皮をじくきく抽をらハ
 休子

災並の云ふ多きハ雨さす
 一子の中を流れるハ後川
 翌日かすハ依へてすハ後川
 首かすは是とんび追殺せ命
 急依をあつめくある焼つ事や
 細上じんあう玉川のああけ
 以大島へあすハ正家手り文一
 志んあうのそまう一寸一
 早すれうね返縁丹をたひくそる

燒多
 矢正
 キイ
 每人
 卜九
 雲雲
 舞多
 磐谷
 燒多

柳世六廿二

九代めハ七んぐをすまことをつけ
 死人よになし追せよ赤の飯
 膏のよの毒人の付東海さ
 五帝ハ子治家のたま世公のあお
 文武のあまれ時の香板の香
 追君よあまく百物かすりす
 常世を海へとましく大さいま
 風川キの風素をすくくのり
 毎旋こまめ箱のきこる

長森
 柳多
 田布
 蜀人
 有父
 集多
 磯川
 南風
 升二

白むくまがはれよのかぬ草母好
 山屋ぶこえかぢ加羅と知ろく
 尻の子さうま不動ハ大テウ
 ら換を田舎村人まろく
 庵人子いぢぬ道臭ハ毛ぬま
 善門ホカワるぢく菜んせあり
 ぱりくこ一向げせぬま急そり
 三子ハ啞こちるのも孝の
 のべ山きくちんく鴨の火をあき

柳世六十三

仏法さえん七経
 六人のうちを母いろへ一人り入れ
 春日ゆハ東海及をハも人ド
 極すすり田百田病くをげま
 立ッそのを森りす斗りの西幸公
 ヨリくの相識ハりく天王若る
 中子ハえせぬ法玉のり
 やり極く東マ急びすつこまれ
 嘗の初者く然も眼をさまし

矢正
 石父
 玉孝
 喜柳
 横好
 射父
 玉孝
 加父

三才のふまへも入ぬ内 宝物つ
 ち色を一首のおくあつくすり
 ほづじしいまの咄しい方う抜うら
 ましよかひよ八飛つけの合まふ
 まま唐かじし所長も其ハ谷中
 談施を存くをすす講説は
 せいろふいふまき小端ハ大あたり
 赤貝の味ハ蝸のあしうがす
 扁鹊ハは月申もよヒをまげ
 カネウ
 里産
 砥産
 青裡
 六ッ
 柳鳥
 カネウ
 赤産
 三枚
 柳北六廿也

眼ごころを 眠つる寝を思ひか
 今のはんごくかたつんやうこまき
 灯のまよはすも淋しく泣い不
 信信ずきよりじ愛くく下る
 通し矢の敷ハ東でもあそまます
 弓子長袋めてよハあうをさうけ
 初苗をのらされハ守極をこます
 以つらう子腰巾着も毛うまへる
 百々
 キヤイ
 如雀
 玉事
 純鳥
 東鳥
 弁二
 万仁
 若笑

三階ハ敬カミケルカワリミダレ
有ルコトヲ子ガシラセテ物入
友志ガクオモクナル所
ハ口ハコトモト人ヲオチコト
コトコト人オホ袋オモコト

秋程
有幸
休
弄者
マイ

矢正評

為悲ノ二字母子ハミダク有ルコト
有ルコトヲ置キ置キ致シ命
案ノノト老ノト違ハ名コト

志
美人
殊川
林五

柳世六

為舞也梅子ハ白ノ初音ニ
由立ガ舞子ハミダク有ルコト
所山号ニ河子縁ノ雲地ニ
ハノ字ハ九ノ字ヲセク由神号
月ニ日ヲ加サテ讀ハ違ハ事
ハ情ヲおらノハノコトキ
秋ノ魚鱗カワリツキハ
母人コトヲ加テハコトハ
燒香ノえキハナラコト

燒香
末学
孤雲
集
漁
丸
末学
青
斗

長い額と馬も一字あまりん
 汁母どなるぶるあばるハ能塚也
 端ノ子達ガ互々す經文讀也
 世の中の子ハ危カクす
 九代目ハ七んぐを好きみを付
 仏法の席着布公家地蔵等
 大板ハ木田見ニドありなり
 いがてゝ袋されハけり坊主なり
 五字七字ありハ六字の白向あり
 折世六廿八

赤一人ハ人ハかりぬ西人人生
 塚安の名ハ嶺ハ廣ハ黄白
 そのまも下也ハるハ智在まり
 一又もくハ山ハ鐘木法へ
 名種ハ子のたぬ種海ハ蛇のため
 万部ハ万白ハ七いと末類ん
 酒白く牛のハあすこハの毛
 目あなハ米をこツ子割ハ人
 たんろをツんハハ三誰なり
 舟者
 無名
 仔匠
 足井
 カラ
 車夷
 香真
 五丁
 舟世六廿八
 無名
 舟風
 尾葉
 青鹿
 蛇四
 料麦
 三枝
 二所
 車子

目加一をこの町のはなへら
 兼好の泣きまうにうまくなり
 桶をがま今川あをわらわれ
 かまよ末やくかゆをあらまわれ
 高替あの子はれおれお慰もある
 高替あの子のあくびは夜をぼろも
 白ひく子笑れおのあね草をあり
 極楽へこのさいちの障子あり
 いふはかこしよこせたり

毒落
 末草
 湯子
 能子
 カ子
 三松
 カ子
 焼子
 青落

柳世六廿七

仏のやい蘭を懐よつげらん
 八歌のやうにまらんべりては
 龍崎あまがさけりてくごつて
 そしばんくは院の延ちらんち
 おしんちの笑本を涙取ます
 飛梅も逆あも世は名をのこ
 二斤一有る通の籠まよつま
 眼をあくと眼のあが立十手
 まつりあああの子ぬれん

毒落
 龍崎
 十手
 飛梅
 一煙
 三松
 二手
 井子

悔を産流ハ鼻ぐ泣く形
 放生會本編子席の二十八
 子海ごな浪廿つ先んは
 梅やーきううそん(かん也ー)
 おり大く娘ハ姑をいぢあし
 着子ぢうまのくし区事なぢ
 鳥籠を栞へあーこく大からん
 通な尼さんげ交りさいんす
 ありくこまめくわろひん金子

柳世六世

お井さんかうむるこはは鏡あ
 ろうばいのお松さん金んあたけ
 すろんのをりにちりけへト志づく
 生まぬかえりやあかつり死ぬも
 けいこが物さめくと個角重
 寝る面柳の下く茶をさる
 一せんの箸くまき賣二人り
 卒るよもさせもやまうねとあて
 辻妻のハへがわく馬をの

川柳
 琴糸
 扇風
 文集
 集書
 寝る
 古書
 妾中
 里柳

ひやうたんの子畑(秤入)くまき
 肩書
 海胆もちろんりつらん
 三井
 一へんのあまう地づくのあまをえ
 古書
 叶海助おやの日子こくを喰ふ
 長菜
 士農工商どしあやうも建つはし
 芋菜
 和のあつを芋やせうらのやうと孝
 菓子
 こくまへんやうも格愛のりかり
 〃
 蓮のさへは襟くちさきき柳
 豊柳
 細工三ッはし一まきくじや
 東馬
 柳世六廿九

一味よりもあるの調子をよく念
 海人
 焼餅をやいくか何ハかハ餅
 赤馬
 尻うへを叩くすも湯をつつる
 白泉
 蓮の茶や首をおやしく象眼キ
 三松
 釣るこまきりくさつさうたねら
 振袖
 ゆえま枯木のわー一あり登が
 本質

山路評

金起の吉の子家の雲井の
 青森
 むうんさる音をほる笑ひ
 一徳

日本のはり婦ハ井ナリ
 中ハ波をこしの波
 ありて車返す不破の雲
 教を命虚室子童をまきし
 ちたけ子斗部 二把をくべ
 十月ハあはれの中子 清老へ
 文武のほまれ時の香花の香
 蘇のさかり久き雲地なり
 何よりの子向奥母を立丁通一

有幸
 末学
 九就
 玉季
 琴嘉
 如崔
 丙夕
 一徳
 於程

析世六 三千

着色のむくさまなる秋の月
 名ハかたれくも名の高ハ山橋
 相一葉ちる風風くろくろ
 七人の一老古風な髪置く素
 親子が逢われぬ程の運のよ
 仏及ハ梅ヶ枝僧及井く写ま
 瓶をみる香く日本名ハひま
 江戸見物の道一ハ浅と逢
 梅子香水子燈の写りくれ

為人
 有夕
 是采
 伴六
 林子
 升二
 亦子
 呈采
 一徳

伝力くちのまゝあがつくとよ免
 海軍代ハない吉原の梅より
 何月くハ何あふ波のたこさえ
 付死を指病を志すカ忠我ん
 直や沙と及ぶたれこおなし孝
 橋をふところ子くおさうばへ
 女子ハえせぬ法圓のつて男
 上海理へ笛を合せる忠曹子
 月の輪へ上人徳をつれたまふ

柳世六廿一

不塚のかけくもあるとす
 名のまゝおつくと白小窓の梅
 此世の吉子潤子柳日梅おし
 多の名もつ子日か陽田川
 徳い塚を為しとる辰へ
 此書くつい方へ徳ゆく赤んぼ
 田角ま常をやつ子メるま
 三益所おとまのあね世常澤
 おじ山家の名おとまもいれず

麦舟
 春巧
 東島
 源島
 香貞
 井二
 山雀
 斗丸
 万仁

お川の舟子みづのあまのあま
 兄も親子もあまの百人
 名のちい人よりあまのあま
 矢筈の飯の上下を繪さや棒
 には似てもあまのあま
 ろんたんの舟子あまのあま
 横倉がこねと鞘へいあまのあま
 おいづんのあまのあま
 ちうふやのあまのあま

笠岳
 三ノ下
 笠山
 玉手
 五所
 碓川
 カサ
 林二
 笠岳

折世六世二

おがりの中がまき子のあまのあま
 海のまも舟子があまのあま
 いちのあまのあまのあま
 まりいづのあまのあま
 おもいづのあまのあま
 細弟のあまのあま
 笠川のおまのあま
 仁あまのあまのあま
 梅の枝子のあまのあま

三枝
 玉手
 川柳
 笠山
 笠山
 笠山
 笠山
 笠山

茶と席くを擗たにびぐををびる
 馬白の名の付々のハネと佐
 ヤマハニをカサにまうるちちん
 ぶらちだききのハネいと一男
 つきもせね種子流石のまうちり
 代筆を兼好よりまうるさかり
 白人れまうるびあ流子ちちん
 神子のニまうるまよあかきの母
 中筆のまうるおれまうるまおん

琴
 棟水
 横好
 流
 門柳
 兼好
 兼好
 兼好
 兼好

柳世六世三

大正ハ依の借を才子まうる
 猶書をあうり子孝のちまうり
 瓜えもまうるひんのハ流者流
 やまうるまうる流ハかまうる
 くらやまのそれまうるまうる
 仁和寺ハたどり流楚ハちちん持
 新織のあまねハ流の糸まうり
 七月ハおがまハ九ハなうまうる
 僧正ハ流書をすう流十志

柳有
 能智
 孤雲
 二町
 蛇内
 玉季
 万仁

扇こねごとくつゝか先を磨てら
まよかひよの居つゞけの念きま
翠の香も深路の香もまきく快
早ひものぶこまおのいぶをら
極木のまゝのぬくも先
庭沃の遠ハ附候の外よ咲
花因中やく香ぬぐもか
まうふやハ一そくおまらゝ
三まいどく極木のまも一ふ

梅世六

芋洗 青控 升子 巾布 三輪 升子 末学 紙写 松前 世也

といてくを千きあこ花が園
ちつと近香の跡の定の梅
さうあげ子赤湯ちりまむせり
知つて人斗りへあいの子の経仕
まゝの島を角の海のごま
り者ハちうやを揮げず四手持
江戸中へ七を通りハひぐく
又ちまねれぬハ左言を都やの
かねこま様く島子ハまらつて

殊川 松前 世也 山 力 糸多 白巻 寛奴 左巻 抄書

まひりつら子原の八頂将ん
つまをがまされてい新新券衆揚
ゆうこさふ有つて陣廓おとて
かろちんこ十三メ文姫ハか
うをうああるを安すまをこはこ
いひる中舞の上へ松のかけ
手遊をたはへかぢる老々菓子
百本子すぢれく琴の音をあぶ
又様をそくかと隣やーまこい

柳世六世五

為雀 春約 松山 玉孝 南風 玉孝 三松 西夕 子ウ

十六夜こいおふ扇も拍子とりま
小舟もゆゑるたのこの端へつま
揚ねえ七人の口をよかてらん
江戸なるハ深川迄子長檣燈
破きにかがきうままよーッあの時
たんぬくも送りあハあられなり
きがり坊子某天ハを
百人子女二人ハ好まうり
とんぶる中魯の状玉をりちぼり

青柳 殊川 松翁 集巻 深雪 里柳 殊川

空を二首のまぐあくする
傍に者へ社名も書を抄 後表
保えと来ぬのるを後遊の言
とちらういへる菓の外へある
けおむ抄子めうがこ工なまい
新道いどうがこ来や手を塔り
千人目鼻をつまんぬ湯をあびせ
そと丸をえきく存るりて法の中
目よ付がお来ぬあう果よつま

柳世六

里産
美約
燒鳥
牛糞
石碓
林二
果林
末草
里産
世六

とんなる中とんがませぬと産を抄

燒鳥

川柳評

翌日つらハ松へもくは西稲川
河川を津を白くあられあり
舟楫さ柄抄く塔を紐あけり
なまらふ入端と集る百子忌
身まうりあありまハ近集の中
經文をあはく秘蜜をうらせり
嵐山堂のあふとあもこれず

キヤイ
燒鳥
葉子
燒鳥
巾風
カヤウ
万化

碧瑠の的をぐるぬあづきうら
 あまのく自由なまぬ五十年
 かき夜首男のゆりてこちり
 六人のうちをちりて入りたれ
 うらまはさき者のまきうゆゆ
 大法令眼のあらまき世連表之
 後表の名ハ榎より廣い業因
 不ちればこそき世まきゆり
 後入城付候子とれハ世の事

柳世六世七

表馬
 和徳
 九龍
 有父
 本系
 志露
 市風
 千歳
 有父

慈うら親をおちんせられ
 清徳もいさしの端のみぞく
 業のまきさきも上戸の席あり
 かしいち八十七と臨死あり
 扇類廿二月甲をまきをまげ
 かびぶらまきけらい歴い縁者
 表物又寛永ちとハ名付あり
 うへいこのまきいお徳ハ世者
 表徳まき司部ハ身もちくま

有業
 矢正
 和徳
 林子
 三枝
 吉野
 実約
 有父
 有父

花女五人をんおんのお二十人 玉手
 五輪 山は十は色の上は色 盤石
 はや子十は小油をのけに色を
 十は小油をのけに色を 万化
 十は小油をのけに色を 失正
 十は小油をのけに色を 風月
 十は小油をのけに色を 志書
 十は小油をのけに色を 是承
 十は小油をのけに色を 是承
 十は小油をのけに色を 是承

折世六 卅八

焼つぎや人のそさうく世を海 梅袖
 角を揚揚子足ら一いのおるを事 万巻
 あは候者二八の折子鎌をたぐ 玉手
 葉やうを事あうく形あす葉のを 伴途
 美は小折日尼地夕日 車屋
 目利あへ折をかつら八日書かひ 車屋
 町ハ書ちハ小換録く名を言し 源書
 位將出をあし付てる百だんを 万化
 五のてをひあうく塔を組あひる 葉子

大いたんをほくくぬハお大とく
身と火のそくす度在地ごく
大馬を和尙有袋子〜こまり
きりむらだ〜切を切髪を切
記書へ通教といふ子あんな〜
は又いおよび十二文とんぐり
提牛のやうに痛く唇けちを境
すいなぶ〜い象をやめハ又字
あくぶをつれが〜すおんおきり

柳世六北

小姫 雨夕 玉季 礫川 左邊 松前 門柳

變會が弟ね〜やハおぶま〜す
茶とんやハあんな〜けつま〜ま
地蔵より毎葉の〜いおひんつる
若新谷え湯湯の注だろ〜
フレイをら〜い水を言二日あ〜
困中者か〜すハ米の〜
お花〜湘南大報〜りれ
切えの〜れ〜ま〜人〜すを
あお〜子〜れ〜ハ〜

カマ 井子 松葉 村麦 雙鳥 無石 香風 矢正 カマ

るが笑止又さう笑ひやうわい
 日かや極楽うらうら女十有
 比まじく庭を遊ばす大こまり
 石の宝殿たてまじこまりなり
 三和二をまじはこまりあまの
 幸楽がゆいこる山のざれん
 せいりくはさきまの満い大あり
 伝ゆやを〜と弘法伝の好す
 乾老も思ふ中やまきまうたう

集巻
 喜巻
 志水
 加文
 横好
 雨徳
 カ高
 毎
 破老

柳世の早

小粒くも色足くこれの大がらん
 二日解かあを著る物もち
 ちくちく和尙ハ粒を十ッあ
 中手くちく手思知る中風病
 角之柳子せす中ら〜角を吹
 右伝ハ原梅いり〜中う子ん
 名んおんの功徳去ハ名彼の辰
 夫〜ハ思ふ由のやうごとく
 小方極楽と島子修了す

任六
 柳柳
 小島
 吉巻
 琴巻
 無巻
 娘小

五位五位下は門はあつたあし
二名直加のいお菊をよこ入好
をんせおん石の松いや活る海
遠多をま帰の松こありのり
仏法の席まよくいあ恩地松を
がいのことをあつたつことあ松とあ
五百萬石とそつあつたつことあ松とあ
伊又いおおぎとつたつことあ松とあ
四うれいし知葉平り松あり

柳世六平一

一徳
二枝
斗丸
能彦
力高
井子
孫川
た逸
徳彦

京の薩つぬえり大へ
中さハ信後権と存まあえ
位將直を免さ付る百たん
るたふふとりことりハせせ
あゆり子不化めんがうをつ
もつまへんゆり子持貴のつかり
相麻をさくくんいハ持を貴
むくすれハ島子芒をさすつ
仲あつたハ松まらつて居る

松系
白巻
了仁
無不
赤子
嵐吉
梅松
海彦

矢正 辰川 渡下 ちりめん つけあき
 信州 下 ちりめん つけあき 留り
 杉原 をりせ やあ つけあき
 され ちりめん つけあき 留り
 新道 と 白半 踏子 入あける
 国 中 ちりめん の 下 ちりめん
 ね の 山 の ちりめん つけあき
 田 今 ちりめん 留り の ちりめん
 ちりめん を ちりめん 留り

折世
 四二

油 や ちりめん つけあき
 水 入れ の 湯 ちりめん つけあき
 あ の ちりめん の 湯 ちりめん つけあき
 ちりめん の 湯 ちりめん つけあき
 ちりめん の 湯 ちりめん つけあき
 ちりめん の 湯 ちりめん つけあき
 ちりめん の 湯 ちりめん つけあき
 ちりめん の 湯 ちりめん つけあき
 ちりめん の 湯 ちりめん つけあき
 ちりめん の 湯 ちりめん つけあき

赤子
 キヤ
 志遠
 金山
 赤井
 河川
 吉名
 三松

翻所「瓶をさすのてくまゝ
 主人「いゝいゝいゝいゝいゝいゝ
 五十町をいゝいゝいゝいゝいゝ
 花急ハけいゝいゝいゝいゝいゝ
 まゝのてハブウトひる尻もいゝいゝ
 加文 毒島 白泉 磯川

識風柳多母三千六編終

柳花六甲三

○俳諧風書品目録江都上野山王之權花屋萬次郎

俵風柳村格達十冊川折息与洞村代名

岡川傍柳青川柳也 岡やうい二冊

岡折句種多之進稿篇江戸五文子折句種多之進稿篇

如父子折句種多之進稿篇

岡筆山王権堂著 岡百山王権堂著

俵風山王権堂著

